

大阪大学21世紀COEプロジェクト 「全国高等学校世界史教員研修会」参加報告

大清水高校 堀部 宏 人

一 はじめに

この研修会は、大阪大学文学部が主体となって文部科学省の推進する21世紀COE (Center of Excellence) プロジェクトに申請した「インターフェイスの人文学」の一環として、東洋史研究室を中心とする「シルクロードと世界史」班が各都道府県の社会科学研究部に呼びかけて、平成一五年八月五日(火)～七日(木)に実施したもので、本委員会からは九名が参加した。

二 研修会のねらい

大阪大学からの案内状によれば、昨今、高級官僚や外交官のようなエリートのみならず海外経済援助やNGOの現場で活躍するスタッフ、あるいは商社などで働く者たちに、あまりにも欧米中心の見方が浸透しているために生じた摩擦や不都合が目につく(国益を損なっている!)が、その責任の一端は高校世界史の教科書にあるという。これを改めるためには、前述の人たちに世界全体の大きな流れを考え、その中に現地の歴史を位置づけるよう促すことが必要になると思われる。

また、新学習指導要領でも西欧中心の単線的発展史観からの脱却が掲げられ、前近代におけるネットワーク重視や近代世界システム論の導入、西洋の役割の相対化など、従来の世界史を乗り越えようとする姿勢が見られる。

今回の企画は大学での実証的研究と高校における歴史教育の「インターフェイス(境界・接点)」を見いだそうとするもので、確かな史実に基づいた公平な世界史認識の形成や個別に発見された事実を大きな世界史に結びつける視点を、大学の研究者ばかりでなく高校教員にも期待しようという大それたねらいが込められていた。とりわけ西洋と東洋の狭間にあつて等閑視されてきた「シルクロード」という名称で代表される草原・オアシス世界と海洋世界に脚光を当てようというものであった。そして、講義後の質問に誠実に答え、前日の質問用紙に対する追加資料を翌朝配布し補足説明を加えるなど、我々により多くを伝えようとする主催者側の熱意がひしひしと感じ取れた。

三 講義の概要

ここで、三日間にわたる講義と質疑応答の中で、特に印象に残った事例を挙げてみる。

- ①桃木至朗先生「現代世界と新しい歴史学・歴史教育」から
・ 国民国家の相対化や経済格差の拡大(明治維新の日本とイギリスの差は五倍、現在のアメリカと発展途上国の差は百倍以上)
・ 冊封体制は、周辺や国内での政治的効果や経済的な利益などを中国も朝貢国も相互に得る平和的システムで、臣下となることを屈辱と捉える日本の真面目さは無意味な反発だということ。
- ②森安孝夫先生「世界史上における中央ユーラシアの意義
―早すぎた征服王朝としての安史の乱―」から
・ 中央ユーラシアの世界史的意義は、歴史の回転軸となった遊牧騎馬民族の供給源としてまた農耕文明圏を結ぶ大動脈として重要な地域ということだけでなく、遊牧民族の変遷はトップの交替に過

ぎず、人々の生活はそう変化しない多民族・多文化国家。

・安史の乱におけるウイグルは、唐の援助要請を受けて動いただけではない。利害を計算した「征服王朝」の可能性があった。

③川北稔先生「ヨーロッパとアジア―近代世界史のパスペクティヴ―」から

・大航海時代と産業革命を重視する近代世界システムの危機（成長の限界 国民国家の危機）二〇世紀第四半期の東アジアの勃興！ 地球規模の環境問題での破綻を視野に入れること。

・補足資料のBC、ADの起源や近世特有な政治算用が面白かった。

④桃木至朗先生「東南アジア史の枠組みを教える方法」から

・中国やインドの文化圏と捉える従来の手法ではなく、東南アジアらしさ（多様性の中の統一）を理解することが重要。例・タイのしたたかさ。

⑤山内晋次先生「遣唐使途絶後の日本とアジア―九―一三世紀のヒト・モノの交流―」から

・博多唐坊や新羅海賊など密接な東アジア海域交流が存在し、日本の硫黄が宋の火薬原料となり博多が集積地であったこと。

・大口消費者であったとしても、日宋貿易における平氏政権の役割は日本史の主張するほど大きくないこと。

⑥杉山清彦先生「清帝国と海域アジア・内陸アジア―世界史上の一六―一八世紀―」から

・清帝国と海域アジア・内陸アジアの関わりと一六世紀以降の銀の流れ（北方で消えてしまう！）が非常に興味をそそった。

・清帝国の枠組みについて、皇帝権や支配の複合性を知り、漢人地主社会の延長という古い捉え方を改めることができた。

⑦荒川正晴先生「シルクロード上のソグド人」から

・ソグド人は、絹馬貿易を仲介した中央アジアのイラン系住民ではなく、唐内の交易ネットワークを支えたオアシス国家の国際商人。ソグド人節度使の安祿山が登場する時代背景…唐は節度使に穀物や軍馬の購入、将兵の給与に必要な絹布を輸送していたが、その購入や運搬にソグド人が活躍していたこと。

⑧白須淨真先生「新しい世界史教育の創造をめざして」から

・国際化に関する議論もなまに追従する事への疑問。研究の多様化・深化は歓迎すべき現象としても、細分化⇨弱体化は困る。グローバルイズムの進行は漢字を基調とする日本語文化の危機を意味する。そうした中で世界史像を再構築する歴史教員の役割は重要という自覚を！

おわりに

今回、最新の研究成果に接した刺激を生かすためにどうするか。何でもかみ砕けば授業で使えるわけではないので、生徒が理解できるように体系化・整理するにはもう少し時間がかかります。とりあえず可能なところから、歴史を暗記物としてではなく、物事の背景、経過や影響を広い視野から考えられる生徒を育てるよう心がけていきたいものである。本委員会では研修会の成果を共有し、これを踏まえた研究を推進していきたいと考えている。

最後にこの研修会の準備・運営などにあたられた関係各位に厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。また、陸から海のシルクロードへとシフトすると漏れ聞く次回の企画にも本委員会は大変期待しております。